満洲脱出記　岸　恒雄（11／3航襲）

昭和20年東満の杏樹飛行場で飛行訓練を受けていた私は7月下旬に体調を崩して牡丹江の陸軍病院に入院させられた。約1カ月して退院も間近となった8月9日の未明非常呼集で叩き起こされた。ソ連が参戦、満洲に侵略して来たのだ。夜が明けて明るくなった時偵察機らしいのが1機飛来、地上すれすれまで来て、一転飛び去った。忽ち隊内は大騒動、私は将校室で文書の焼却を命ぜられた。運び込まれる文書を片端からペーチカに放り込む。たちまち汗まみれになったが拭う暇もない。その内に「転進」という事で軍用列車に乗車南下した。列車は本部のある通化に着くと暫く滞在した。8月15日終戦の夜、宿営近くの山から雄叫びと共に松明の火が上がった。反日パルチザンの行動らしかった。この時部隊の編成はどうなっていたのか、指揮系統はどうだったのか知らされてあったのか知らないが全く記憶にない。兎に角日本に帰還する為に列車で朝鮮半島を南下、8月20日頃釜山に着いた。この間殆ど車中にあったように思う。食事や排泄がどう行

われたのか、これも記憶に無い。運転手は現地人で下士官が側に同乗していたとも耳にした。釜山には59期生の他60期生も大勢集結していた。8月21日出航月明の玄界灘を渡り朝霧の中博多港に着いた。下船して婦人会の炊き出しの白いお握りが本当に美味しかった！　その夜山陽線、中央線と乗り継いで8月末豊岡の本校に着いた。途中広島を通ったのは夜半だった。大きな建物などは全く見えずチロチロと火が燃えていた。炊事の火だったかも知れないが鬼火のようにも思えた。約3週間の行動はポツポツと点の記憶はあるが連続しての線の記憶は無い。「陸軍士官学校史」平成8年2月発行を見ても詳しい事は記されていない。

『こぼれ話』一、我々が通化駅に着くのと相前後して飾りの付いた数両編成の特別列車が着いた。誰が乗っているか伺い知る事は出来ない。窓に濃緑色のカーテンが重たく引かれてあった。「満洲国皇帝の蒙塵の列車だ」とひそひそ話が流れた。二、牡丹江を出発して暫くして旅客列車に出会った。女性と子供のみが乗っているらしい。小学生上級と思われる男の子が近寄って来て話しかけてきた。「僕たち内地へ日本へ帰るんだ。又会えるといいね」列車には機関車は連結されていなかった。男の子はランニングシャツと短パンだった。三、帰国列車が南朝鮮に入って一時停車した。老婆が一人近寄ってきてまだ青い林檎を一つくれた。側に居た日本語を話せる青年が言った。「この婆さんの孫は貴方と同じ歳ぐらいらしい。戦争に行って未だ帰って来ないらしい」林檎は固く酸っぱかった。